

ヒトはなぜ仲間を求めるのか？—生態学的考察

片野 修

動物が群れる理由

動物は単独生活を送るものから群れるものまで、さまざまな社会性をもつ。異なる種の個体どうしが助け合い、どちらも利益をえることを相利共生と呼び、進化を経て相手の存在がなくては生きていけない場合を絶対的共生と呼ぶ。シロアリの体内には、セルロースを分解する細菌がおり、そのためにシロアリは固い植物を消化・吸収することができる。細菌はシロアリがいないと生きていくことができない。

絶対的共生ではないとしても、生態系において環境や捕食者、植物の分布などがある条件に達したときに、同種あるいは他種の個体が助け合うことを協調と呼ぶ。ヒトとヒトが仲間を求め合い、助け合うのは協調とみなすことができる。協調は必要がなくなれば解消される。

ヒトはなぜ仲間を求めるのかという問いは、ヒトはなぜ協調するのか、と言い換えることができる。

ほとんどの動物は捕食される脅威にさらされているので、同じ種の個体が捕食者に対抗するために群れることは多い。群れていれば、敵を早く見つけることができるうえに、協調して敵を撃退することができるかもしれない。しかし、ヒトには現在強力な捕食者はいないので、捕食者を避けるために群れることはない。

次に考えられるのは、繁殖のために群れるという見方である。異性を独占することは、子孫に DNA を伝えるうえで有利であり、ハーレムを形成する動物もいる。しかし、ハーレムを維持するためには、ハーレムを持ってない個体を常に撃退する必要がある。また、ハーレムを維持するだけ十分な食物が保証されなければならない。

一方、ほとんどの動物は一年の一時期にだけ繁殖するので、そのときにだけ集団をつくれればよいと考えられる。集団をつくらなくても、交尾をしたり精子をかけたりすれば十分な場合も多い。だから、繁殖のために一年中群れる動物は少ない。ヒトの場合、集団で生活することによって、その中で繁殖することもあるが、一方で近親者との婚姻は遺伝的多様性を失うことになるので、あえて集団外の異性と婚姻関係を成すことが多い。こう考えると、ヒトが繁殖のためだけに集団をなすと考えることには無理がある。

ヒトは仲間をつくる

捕食者がいなくなったヒトは、安らかに生きてきたわけではない。ヒトの殺戮の歴史は、ヒトにとって最大の敵はヒトであることを示している。ヒトの集団は、別の集団と対抗し、闘ってきた。ヒトが仲間をつくるのは、外部の敵に対して有利になるためである。私のホームページの評論『生態学的に権力を分類する』で考察した「集団権力」を強くしないと、他

の集団に滅ぼされる脅威にさらされる。

なぜ集団どうしが闘ってきたのかと言えば、生態学で言うところの「資源」が不足したからである。資源とはふつう食物であり、ほかに住み場所、隠れ家、繁殖場所、異性などを指す。ヒトは人口を増やし続けてきたが、そのたびに必要な資源は増加した。他の集団を滅ぼすことができれば、その土地や食物を奪い取り、仲間を増やすことができる。一方、闘わなければ、自分たちが滅ぼされる。

仲間と敵の区別はむずかしい問題である。協調するか敵対するかは、生態・環境条件のほかに、人間関係によって左右されるので、昨日の敵が今日の仲間になったり、その逆が生じたりすることは、歴史上いくらでもあった。そして現在でも、国どうしの戦争や領土・領海争いから小学校のいじめ・カーストに至るまで、ヒトとヒトの争いは絶えることなく続いている。歴史上の闘争においても、漫画やアニメにおけるフィクションにおいても、味方は正しくて敵は悪いことになっている。悪い証拠としては、侵略してきた、虐殺した、ルールを守らなかった、謀反を起こしたなど、さまざまな理屈がつけられるが、敵から見れば、こちらが悪い理由がいくつも挙げられる。そうなると、何としても敵は悪いのだということを広く知らしめなければならない。

日本では鬼、西欧では魔女なるものが発明され、しばしば悪の象徴となっていた。長野県鬼無里の紅葉伝説では、皇族の子を宿した紅葉という女性が長野県の鬼無里に追放されたのち、村人には親しまれていたものの、都から派遣された将軍によって鬼女として成敗された悲劇が伝承されている。鬼も魔女も実在するわけではなく、攻撃したい相手を蔑むために使われてきた。

ヒトにとって「敵」は、他の集団である場合と、同じ集団内の他個体である場合がある。他の集団と資源や覇権をめぐる争う場合には、同じ集団内のヒトは仲間であるが、同じ集団内で争う場合には、他のヒトは味方にもなれば敵にもなる。同じ集団内では、一人であるより仲間を作った方が有利である。その結果、派閥、同盟、仲良しグループなるものが、どのような集団にも生じることになる。

生物は自分の成功のために生きている。捕食されずに食物をとり、成長・成熟して繁殖し、子孫を残す。それができない個体と遺伝子は滅びることになる。この原則にしたがえば、敵に打ち勝つことはどうしても必要である。一方、どの生物も同じように成功しようとすれば、勝者と敗者が生まれることになる。

どうしたら勝てるのか

ヒトとヒトとの争いに勝つ方法はいくつもあり、状況によって同じではない。原始的な喧嘩では、体力によって強いほうが勝つ。武器を発明したヒトは、やがて弓矢、斧、槍、刀剣、鉄砲などの道具を用いて、他人を倒そうとする。そうなると、体力のほかに、武器を使う能力、知能、財産、さらに他個体と同盟する能力などが重要となった。集団と集団との闘争あ

るいは戦争では、仲間との団結力や集団としての戦略も影響する。闘うことの目的は、食物、土地、財産、社会的地位、魅力的な異性など多様である。どれだけ優れたヒトであっても、所属する集団が負ければ没落する。

現代では、武器を使った戦争はあまりに犠牲が大きすぎるので、一部の国を除けば少なくなった。しかし、ヒトとヒトの争いは相変わらず続いている。

生まれつき平等なヒトの集団では、時間が経過したり、個人が成長したりするにつれて、順位が形成されやすい。小学校のいじめは、順位づけのあらわれだと思えることができる。言い争い、喧嘩、学業、運動などを通して序列は形成されていき、とくに男性間の順位は女子の獲得に意味を持っているかもしれない。しかし、高校までの順位あるいはカーストは、ほとんどの場合、社会では意味をなさない。意味があるとすれば学歴くらいであるが、絶対的なものではない。なぜならば、社会で意味があるのは、その職種でやっていける能力であり、学力ではないからである。その後は、会社に入った新入社員、同期の公務員、大学の研究室、スポーツチームのメンバーなどで序列が形成されていく。

個人競技のスポーツでは、正確に記録・採点される点で運動能力が正しく評価される。学校や入学試験の採点も、ふつうは公正であると考えられる。選挙は日本などの先進国では公正に行われるけれども、アイドルの人気ランキングや世論調査では、操作されていることがあり、必ずしも信用できない。さまざまな集団における人事・評価では、個人の能力よりも、有力者の意向、世襲、買収その他の人間関係によって結果は左右される。

逆の見方をすれば、ヒトの社会では知力や運動能力、人間性などにおいて劣っていても、人間関係を利用すれば、あるいは強い集団に属していれば、実力以上の報酬や地位をえることができる。親が権力を持っていると子も強くなることは依存順位と言われ、ニホンザルなどで報告されているが、同様のことはヒトでも政治家や芸能人、財閥などで知られている。ヒトが生きるということは、ありとあらゆる人間関係を利用して、少しでも成功しようとすることであり、個人としての能力以上のものを求めることである。

なぜ差別は生じるのか

能力以上のものを求めるためには、集団の中で順位あるいは地位を高める必要がある。何か欲しいものがあるときに、平等にすれば獲得できる確率は小さくなり、競争すれば能力が高い個体が勝つことになる。一方、集団の中で高い地位や順位を占めていれば、争うことなく欲しいものを手に入れることができる。

動物でもヒトでも、順位は上位ほど厳密に決められる。一方、中位から下位にかけては、大まかなグループあるいはカーストが形成されるだけで、順位は明瞭でないことが多い。それは、劣位の個体が争ってまで獲得できる資源が乏しいからである。もちろん、下位の個体が上位の個体に挑んで、順位を上げようとすることはある。

ニホンザルなどの哺乳類の群れでは、老齢となったボスがしばしば若くて成長した個体

にとって代わられる。私が研究していたカワムツという淡水魚では、成長にともなって順位が上がるほか、繁殖活動によって体力を消耗した雄は順位を低下させる。しかし、中位や下位の個体間の順位は明確でないことが多い。

ヒトの集団においても、中位や下位の個体は上位の個体に服従する中で、互いに友好的な関係を築くことがある。どちらが上位かを争うよりも、互いに助け合う関係を築いた方が穏やかに過ごすことができるからである。しかし、このような関係においても、少しでも自分だけが得をしようとしたり、他人を蔑んだりしようとする本性があらわれることもある。

自分の実力以上の権力をもつために、社会ルールとして差別があることは都合がよい。身分制度やカーストは、優遇されるヒトにとっては都合の良い制度だった。性や人種による差別も同様である。身分というほどでなくても、家柄や財産によって高い地位を占めることも普通だった。

現代でも、年齢や性別による差別は、高齢の男性による社会支配において普通に行われている。民族や出身地、家系による差別も根強い。このようなルールに逆らうことは、権力者に逆らうことだとされて、抑圧されてきたのだろう。

その結果、「強いものには逆らわない」習性が広まったと考えられる。さらに、「強いもの」に媚びへつらい、あるいは忖度することによって、自分の地位を上げようとする戦略が出現する。権力者に嫌われると、迫害され殺される危険が大きいので、ヒトは集団内で穏便に媚びへつらってきたと言えよう。

媚びへつらうことのコストは、誰もが媚びへつらうと権力者がますます強権を発動するようになり、無理な命令をしたり、媚びへつらう者どうしの競争を煽り立てたりすることにある。織田信長の時代ならば、無理な命令を達成できないと失脚し、さらに家来どうしが疑心暗鬼で嘘をつく世界だと言えよう。

人間では、順位の形成のされ方や、その中での生き方は多様であるが、おおまかに二種類に分類される。一つは、制度として順位が規定されており、それぞれの権限も保証されている場合である。具体的には、公務員や会社員の役職や軍隊の階級が挙げられる。それぞれの個人が占める役職によって給料が定められ、その能力は関係しない。能力が高いと出世しやすいけれども、人間関係とくに高順位の個体による評価が影響するので、能力が低い方が出世することもある。

制度として順位が決められていない集団では、スポーツやテストにおいて個人の能力が結果に反映されるような実力本位の場合と、順位が状況によって変わりやすいか、明確でない場合がある。後者は、町内会やクラスの人間関係で見られ、威張っている人間がひょんなことから失脚したり、引越して来た新入りがしだいに頭角をあらわしたりすることは、よく見られる現象である。人間のもつ権力は、体力、知力、コミュニケーション能力、容姿、行動力など多様であるから、それぞれの威力が発揮される局面によって変わるのとは当然かもしれない。走るのが速い子が運動会で優勝したのち強くなったが、校内テストののち弱くなるなどの現象は、誰でも思い当たることがあるだろう。

最近、コミュニケーション能力が高いことが、肯定的に評価されることがある。知力や知識力において実力がなくても、友人や知人が多く、助け合える関係を持っていることが、社会での成功につながると考えるためである。確かに、周囲の人間と調和し、集団の目標を達成することは重要である。一方で、コミュニケーション能力を権力者に対して発揮し、忖度したりおもねったりするヒトは、出世において成功することは多いかもしれないが、仲間からは嫌われる。さらに、昔から今まで、どのような社会でも権力闘争はおこり、出世しようとするヒトは、自分を委ねる権力者を選ばなければならなくなる。ある権力者の子分は、その権力者と敵対する別の権力者にとっては潰すべき存在となり、権力者の力の優劣が逆転すると失脚することになる。

ヒトの生き方が変わってきた

ここまで述べてきたことから、読者はこの世界をますます嫌になるかもしれない。しかし、旧態依然としたいいくつかの国を除けば、世界は確実に変わりつつある。グローバルな情報社会になって、個人の生き方が多様になってきた。どこに住むのも、何を仕事とするのも自由になりつつある。権力者に媚びへつらわなくても、生きていけるようになってきた。個人が実力を発揮する場所としてインターネットの世界が広がり、無能な権力者はあぶりだされ、非難されやすくなってきた。

大昔の人間社会では、十分な食料をえて生きることが目的だった。そして病気にも罹らず、他の人間との闘争でも勝ち残って、繁殖することが成功だった。このレベルの生き方は、他の動物とそれほどちがわない。やがて、社会の中に階層あるいはカーストが生じると、それを維持することが成功への近道となった。自分の実力以上に高い地位を占めようとする人間の本性は、このレベルの発想である。高い地位を占めることができれば、低い地位の人間を使用したり奴隷化したりして十分な食料を獲得し、さらに繁殖にも成功し、長生きすることができるからである。特定の組織や個人が絶対的な権力を持つ独裁体制は、それによって多大な利益をえる者にとっては理想的であった。

ところが、普通に働くという条件下で、贅沢をしなければ食べていけるようになると、ヒトはさらに富裕になり地位を上げようとするほかに、好きなことをして生きたいと思うようになる。必要以上に働かずに遊んで暮らしたい、貧しくても他人に命令されずに自由に生きたい、繁殖せずに自分だけのために生きたいなど、一生の送り方は多様である。食料—地位—収入と続いてきた生き方は、しばしば時間や自由について犠牲を強いてきた。働きすぎて健康を害するのは嫌だと思ふヒトは多いだろう。

それでも、ヒトは他人に認められたい、あるいは同じ考えや趣味をもつヒトと交流したいと思うかもしれない。何かしら自分には優れた点があり、それを認めてくれる他人がいると、生きる自信になる。権力者に従わないと生きていけなかった昔の社会では、社会の共同幻想に反した個体は抑圧され、排斥されてきた。しかし、現代の民主主義社会では、犯罪になら

ないかぎり、考え方や行動について自由である。インターネットを通して世界とつながることができ、少数でも仲間を見つけることができるようになった。

経済成長一辺倒ではない生き方としては、趣味のほかに、環境を大切にする、ヒト以外の生物を愛護する、経済的に役に立たない研究をする、弱い立場のヒトのために尽くす、ヒトとヒトのつながりを助ける、などさまざまなものがある。これらは経済成長を大きく押し上げることはならないかもしれないが、社会を充実させるという点では意味があり、これまでなかった方法で社会や経済を活性化させることもあるかもしれない。

限られた資源や地位、利権を求める場合、ヒトとヒトとの競争は厳しくなる。競争が厳しくなると、ヒトとヒトとの関係はぎくしゃくしたものになり、醜い闘争が生じるかもしれない。これに対して、経済一辺倒ではない生き方では、競争は生じないか、生じても厳しくない。ライバルを倒す必要はなく、むしろ仲間と協調した方が達成度や満足度は高い場合が多いだろう。

かつては上手に獲物を狩ることが権力への第一歩であり、農耕が始まると農作に成功することが重要だった。その後は武力や政治力、そして経済力が重要になっていくのだが、現在では権力も多様になっている。ある分野や趣味において強いということは、それについて多くの時間を割いて勉強や努力を重ねたからであろう。遺伝的資質の影響はあっても、小さくなっている。このような生き方の多様性を文化的進化ととらえるなら、軍事力や政治力で国民を押しえつけ、画一的な生き方を強いるのは退化である。社会が退化すると、せっかく芽生え始めた多様な生き方が無に帰す恐れがあり、それを防ぐための協調や闘争が必要になる。

私がこれまで述べてきた新しい生き方が経済を悪化させ、ヒトの暮らしを貧しくさせると主張するヒトがいるかもしれない。しかし、日本では、社会や経済を活性化させるためにすべきことが多く残されている。この点については、あらためて考察したい。また、新しいライフスタイルを求めることが、新しいビジネスをもたらすことも考えられる。地球温暖化を食い止めることによって災害を減らすことができれば、経済の損失も減るはずである。廃棄物のリサイクルやリユースは、それ自体新しい技術や商いをもたらすと考えられる。

集団のリーダーは、二つの点で選ばれる。そのリーダーがいることによって集団のパフォーマンスが高まることが第1点であり、そのリーダーは有能だということになる。もう1つは、そのリーダーがいることによって、周りのヒトが得をする場合である。この場合には、リーダーは無能であってもよく、むしろ無能なほうが好まれる場合もある。既得利権で潤うヒトたちにとっては、規制改革によって組織のパフォーマンスを高めようとするリーダーは好ましくない。一方で、集団が外敵と競争関係にある場合、無能なリーダーの下では、集団は競争に負けることになる。

日本の社会では、いまだに古い価値観や利権構造がはびこり、どの分野でも権力者が思いのままに他人を支配しようとしている。はびこるだけならいいかもしれないが、油断をしていると、さらに古い世界に戻して武力も支配すると、自由も民主主義も失われる。しかし、

これからの世界では、ものごとが適正な方法で、すぐれたリーダーの下で進められなければならない。そうでないと、企業間競争で劣ったリーダーの支配下にある会社が淘汰されるように、集団は滅亡する。

古い価値観や権力者を打破するためには、一人一人が感覚を研ぎ澄ませて、新しい価値観を浸透させることが必要である。さらに、さまざまな権力が特定の個人や団体に集中することを防がなくてはならない。この点で、政治権力だけでなく、富を独占する個人や企業、さまざまな分野におけるカリスマやドンなど、目を向ける対象はいくらでもある。パワハラが報道されると、特定の個人が悪いという論調になりやすいが、その分野あるいは世界で古い価値観が支配しているのではないかと疑うべきであろう。ヨーロッパの国々を見ると、民主主義や差別のない社会が浸透し、環境とヒトの生き方を重視した政策が採られている国が多く、経済成長が高くなくても人々の幸福度は高い。日本の社会が退化せずに成熟していくことを望みたい。